岩槻区における都市形成史に関する研究

K03130 松本 博文

1 研究背景と目的

岩槻は1457年の岩槻城築城以来、いくつもの時代において武蔵の国の要所として栄えてきた。また江戸の将軍が日光東照宮に参拝に向かう「日光御成道」での宿場町としても重要な役割を担っていた。岩槻区中心を通る県道2号はかつて岩槻城門より西に延び、商いが盛んに行われていた町家建築が軒並み建ち並んでいた。しかしその面影は僅かながら残されているだけであり、岩槻城の建物も今では跡形もなく取り払われ、岩槻が由緒ある町であるということを今に伝えるには歴史的建築物は稀少である。2005年4月旧岩槻市はさいたま市と合併し、新たにさいたま市岩槻区としてスタートした。さいたま市全域での文化財再評価が開始された。そこで今回、数少ない岩槻区の遺構、史資料等から岩槻が当時どのような街であったかを位置づけるとともにその実態を明らかにし、岩槻の歴史的建築物の保存活用に役立たせることを目的としたい。

2 研究手法

2－1岩槻市史等の史料から岩槻町についての基本的な知見を得る。

2－2実測調査をおこなう。

2－3 2－2を復元して当時の類似建築との比較を行い、岩槻町の建築の位置づけを行なう。

3 岩槻町について

3－1岩槻城について

岩槻城が1457年に築城された。築城者は通説では太田道灌とされてきたが、新説では成田自耕斎正が有力視されている。

3－2岩槻城下町について

岩槻が城下町として形態を整え始めたのは、近世初頭に当時の城主高力清永により戦乱で荒れた町並みの復興に力を注いたことに始まり、その後阿部氏に引き継がれ、城下九町が完成した。後に大岡時代には五ヶ新田が加わり“九町五ヶ新田”と呼ばれた。それらは市宿町、久保宿町、渋江町、横町、新町、富士宿町、林道町、田中町、新曲輪町の九町、江川新田、佐太夫新田、長左衛門新田、斉藤新田の五ヶ新田である。

主に商業は市宿町。商・農業は久保宿町、渋江町、田中町、横町であり、そして主に農業を営んでいたのは富士宿町、新曲輪町、林道町であった。

4 調査対象建築物について

4－1志水邸

所在地：埼玉県さいたま市岩槻区本町

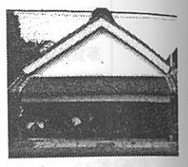


写真1 志水邸 外観

明治初期の建築物で岩槻の市宿通りに面している商店で当時は染物屋であった。見世の間の左側には染料の瓶がいけてあり、現在では板の間が張られているが、中は当時のものが保管されている。風呂場などの張り出し部分が増築部分である。

平面構成

間口が広めに取られている町家建築であり通り土間が主屋奥まで伸びているのが特徴的でこれは染物を屋内で干す際に一筆をそのまま干せるようにするためで、壁には干竿を掛ける機能もついている。また平屋であるが天井高が高く屋根裏部分に女中部屋として5畳程の寝室がある。

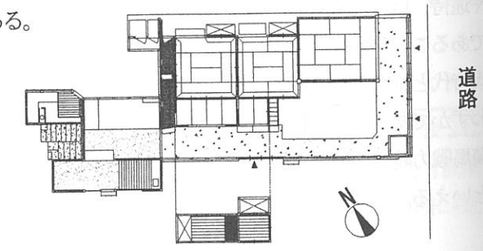


図1 志水邸 1階平面図

4－2長谷川邸

所在地：埼玉県さいたま市岩槻区本町

明治10～20年頃に建てられた見世蔵造の町家建築である。当時は木綿問屋が商われていた。建物は見世蔵主屋、離れ、そして米蔵もあったが火災によって焼失した。

昭和56年に大きな改修が行われ、下屋もこの時にとりつけられた。

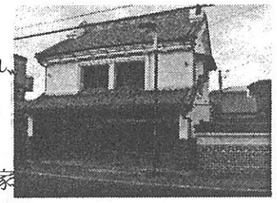


写真2 長谷川邸 外観

平面構成

建物は典型的な見世蔵造の町家建築である。しかし細部において特徴をもった建物である。見世の間には引き下ろし戸があり、これは珍しい例である。階段棚や電話室も兼ね備えており、当時この店が栄えていたことを印象付ける。また見世蔵と主屋をつなげる引き戸はとても厚く防火戸の役割も担っており、店が焼けても主屋を守るという工夫がなされていた。主屋は平屋建てであるが改修前は屋根裏部分に女中部屋があった。

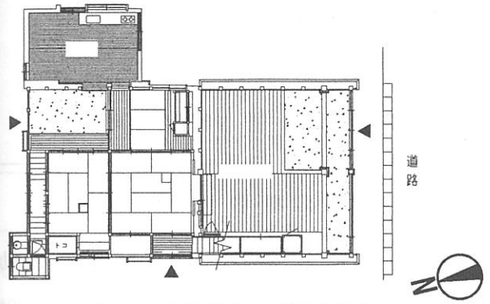


図2 長谷川邸 1階平面図

4－3矢作人形店

所在地：埼玉県さいたま市岩槻区本町

当初は昭和10年頃に建てられた平屋であった。しかし昭和25～26年に2階をかぶせるような形で改築が行われた。そのため主屋の柱は2本の柱が連なるように立てられている。

写真3 矢作人形店 外観

平面構成

表土間で見世蔵的な型式をとっている。この建物の生い立ちから1階と2階の間に人が立って歩けるほどの屋根裏部屋があり一部が収納として使われている。

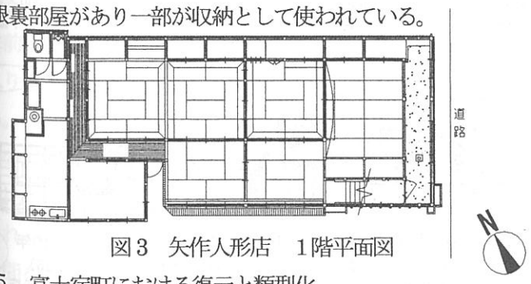


図3 矢作人形店 1階平面図

5 富士宿町における復元と類型化

5－1岩槻市史・通史に載っていた富士宿町の絵図をもとに宝暦6年(1756)の富士宿町の平面を明らかにし、現在の地図上にプロットし、町の規模の比定を行うとともに各戸の類型化を行う。現在は失われた18世紀中期の町家建築の形態を分析する。

5－2富士宿町の沿革

諏訪小路の外に形成された富士宿町は、中世において富士浅間神社を中心に市立てが行われた古い町である。この町の耕作地は、田は知楽下・諏訪下、畑は東原地にあった。町の中心を通る道は“越ヶ谷道”と呼ばれ近世初頭の御成道であった。

大岡時代の宝暦6年(1756)より約120年間(1756～1870頃)には平野筋の廻状継立を林道町、新曲輪町とともに1日～20日、21日～26日、27日～晦日までを分担しておこなった。城内や城下で火災があった際には役割の場所に出向き消火にあたった。

5－3平面構成の考察

富士宿町の平面構成は土間住居と呼ばれるものと推定される。土間住居は近世以降の庶民の住居様式としては普通であったと考えられ、滋賀県の湖北地方から、北陸、福島、山形県にかけて分布しかつて東日本に広範囲に存在したことが推測されている。富士宿町において土間が通りから背部に配置されている住居が9割を占め、現存する岩槻の歴史的町家には無い形態である。類似した町並みを作っている地域は、福島県南会津郡の大内宿など東北地方に存在する。大内宿は通り側に座敷を、そして後ろに土間を配置している。

6 古文書に見る江戸時代の住居

6－1勝田家文書

（i）勝田家

勝田家は、家伝によると戦国時代に来岩し、岩槻太田氏に仕え、市立に努力した。代々市立の肝煎としてその差配に当った。他に町年寄などの要職を勤めた。同家の文書は160点を数え、市を中心とする商業史料で占められている。

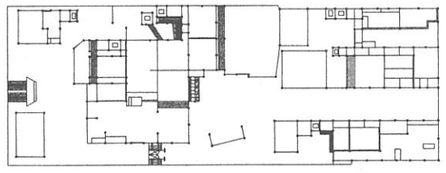
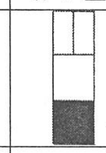
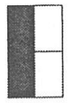
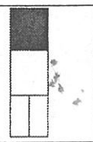
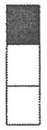
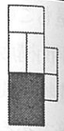


図4 勝田家 1階平面図

表１　富士宿町の類型

型名	2・1・土	1・土	2・土(タテ)	2・土(ヨコ)	土・1・2	1・2・1・土	土・1・1	名主
								
戸数	14/40	11/40	4/40	5/40	3/40	1/40	1/40	1/40
特徴	・2間部分に必ず「トコ」「押入」が入るタイプは4戸あり、どれも土蔵。雪隠があり町内において富裕層であったと考えられる。 ・2間に何も入らないタイプは、土蔵は持っていないが物置を持っているタイプが多い。	・物置を持っているタイプは2戸あり、押入等の収納も付いているが間口が狭い。 ・何も持っていないタイプは3戸あり間口も狭く町内において貧しい層に当たると思われる ・その他ばらつきはあるが1つは機能をもっている。	間口は比較的広く収納系の機能が少ないのは部屋が2つ付いているからではないだろうかと考えられる。	「土・2(タテ)」を横にしただけであるが、必ず土間が南東に位置されている。	平面だけを見ると従来の町家建築と分類できそうであるが間口に制約されているわけではないので農民家のいくつもあるタイプの1つであると考えられる。	このタイプは1戸のみで構成を見るからに「2・1・土」の通り側に1間増築したのではないかと考えられる。	「土・1・2・」の2間が1間になっただけである。	町内で一番偉い名主のお屋敷なのでとても豪華な作りとなっている。

（ii）平面構成の考察

市宿通りに面して町屋が３軒連なっており奥に名主屋敷を配している。上から１番目の町屋は通り土間が母屋奥まで伸びておりごく一般的な商店の町屋建築である。２番目は土間が表面半帖、中間に半帖あるだけで、従来の表店とは形態が異なっている。職人の町屋建築であったと考えられる。３番目の町屋は通り土間が配されており、表面は土間が広く取られていて。クドも２つあり正面に板張りがあるため、ここは飲食店であったのではないかと思われる。この３軒はとても狭い間口で有効的にスペースを使い商売が行われていたと考えられる。勝田家の屋敷は後述の８帖４室の発展型で設備がとても充実した名主の屋敷だったと考えられる。

６－２吉田家文書

箕輪村,明和７年の日光社参による関係資料から富士宿町以外の村の平面形式を分析する。

（i）吉田家

箕輪村の開発農民の家柄であり、代々世襲名主を勤めた。

（ii）平面構成の考察

岩槻区域周辺の農家は四八帖と呼ばれる８帖４室が田字型になった型が基本である。箕輪村は三間または四間の居室をもち、土間は必ず主屋の中に設けている。土間の大きさは４坪が過半数、通常の土間に物置などを設ける特徴がある。イロリは主屋の中で、土間との境で家の中心に設けられている。この当時の敷物は筵、畳が使用されているが同じ村内においても居間数や敷物などに大きな差があった。また藍屋を設けた家が 22 軒のうち5軒ある。

表２ 岩槻区の住居平面の変遷

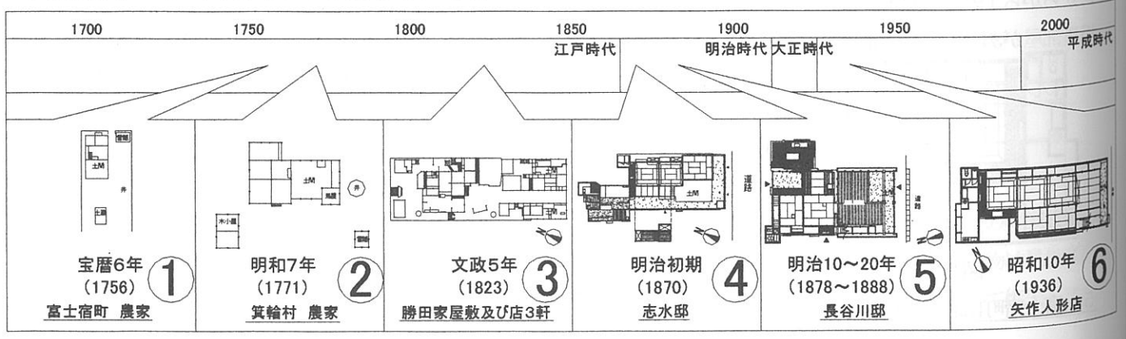
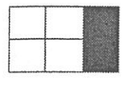
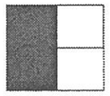
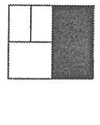
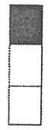
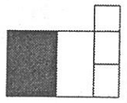


表３　箕輪村の類型化

型名	2・2・土	土・2	2・1・土α	土・1	3・2・土	2・1・土β	土・1・1	3・1・土
								
戸数	5/22	4/22	3/22	3/22	3/22	2/22	1/22	1/22
特徴	・8帖4室のオーソドックスな田字型住居。当時の岩槻周辺の農家の典型とされていた。 室の半分が筵敷き、もう半分が畳であった。また雪隠、物置が各個必ず設けてあり生活していくには十分な設備が備わっている。	・主屋の規模、部屋の数から村内では低い層の住居と思われる。しかし雪隠や物置などの設備は必ず備わっている。富士宿町の類型と比較してみると、全体的に建物は充実しており	8帖4室のオーソドックスな田字型住居が3室になったタイプ。建物の規模、設備等を見ても典型とあまり差は感じられない。細かいところでは各個様々であり、そこに住む家庭の生活様式が如実に表れているのが特徴的である。	土間に対して1室しかない、村内で最も貧しい層が住んでいたと思われる住居。雪隠は全ての住居においてあるが、離れて作られているのは1軒しかなく他の型式と比較すると大きな差が感じられる。	オーソドックスな8帖4室田字型にツノヤが付いたいわゆる曲がり屋型の住居。3軒とも藍屋があり、箕輪村内においてある程度力を持ったタイプだと考えられる。	土・2型の2間のうち1間を半分に分けたような形である。3間あるが主屋の規模も小さく住居としては豊かとは言えない。	町内で一番偉い名主のお屋敷なのでとても豪華な作りとなっている。	型式だけ見ると3・2・土型と似ている曲がり屋であるが土間に対して室がとても小さく、村内において異質の住居である。村内において特別な家業を担っていたのではないかと考えられる。

7岩槻区の住居平面の変遷

7－1調査した３軒の平面と古文書、絵図をもとに復元した平面による住居の平面系の変遷を行い、岩槻区の民家が時代と共にどのように移り変わったのかをたどる。

7－2まず①と②は江戸中期のもので、各町村で生活レベルに差は出てしまうが土間の配置関係において大きな差異がある。①は土間が通りから奥であるが、②は通りに対して室と土間が並列である。次に②と③であるが大きな変化は通り土間の採用である。②は農村、③は盛んに商いが行われていた城下町であり、土間の使い方が根本的に違う。また③の「店」は京町屋の形をとっており、②と比べ狭隘な空間に多くの設備を凝縮し空間を有効活用しようという意図が見て取れる。③、④について同じ市宿通りに面しているのだが、両者の最も大きな変化は土間からクド、イロリといったダイドコの機能の隔離である。また③が京町家型に制約されているのに対し、④は前土間と通り土間の組み合わせで、塗り屋、そして妻入りと、京町屋型と比べ比較的自由に平面を展開している。④、⑤は共に広い前土間に対して室数に差はあるものの、配置関係に共通点が見受けられる。しかし⑤は④に比べ更に京町屋型から離れ、見世蔵を持つ川越に代表される関東町屋型の見世蔵造である。そして⑤、⑥は通土間を持たない前土間型式であるが、室の配置関係に④から続く一連の流れが感じられる。しかし基礎が石の土台から布基礎へ変わるなど建築技術の発展による時代の変化を見て取ることが出来る。①～⑥までで共通していえることは、用途、形態の変化に大きな変化は感じ取れるが土間が人々にとって必要な空間であったということである。

おわりに

岩槻の町屋建築は多種多様である。京都から発祥した町屋は全国的に広まり時代を経てその地方によって特色ある町屋建築として発展した。川越と程近い岩槻は、全体としては見世蔵の建築物が多い。しかし、屋根の形状、室の配置関係、その他細かな点で様々な違いが見受けられ、岩槻の町屋建築は色んな町屋建築が入り混じった坩堝のような特徴を持っている。

今回調査をした建物以外で岩槻には未開拓の歴史的建築物が数多く残されている。それらを解明し、保存・活用するためにもこの研究が役立ってくれることを願う。

参考文献

岩槻市史　通史編　1985年
岩槻市史　近世資料編Ⅳ　地方資料(上)　1982年
東北地方の民家　小野芳次郎　明玄書房　1968年
日光社参ニ付家屋敷臣細家図面　勝田家文書　108番